



みきとみお  
三木富雄

《耳》

(きつね)

みみ〜っ。こんなきもちわるいもん  
ぼくらはつけとったんか。

あらためて、こんな大きく見せつけ  
られると、なんか自分のからだぜん  
たいがきもちわるうなってきたわ。  
どうしょ。きょう寝られへんかもし  
れやんわ。

(うさぎ)

安心し。これはにんげんの耳やから。



みきとみお(1937-1978)

三木富雄は、1950年代末から讀賣アンデパンダン展を舞台に活動を始めた作家で、1963年のその閉幕に至るまで同展を圧倒した。日常的な対象物の増殖の一環としての《耳》シリーズは、単品の作品にとどまらず、分解されたもの、複数で並べられたものなどに展開されていった。耳を選んだというより「耳に選ばれた」と作家自身はのべており、情緒性にひきずられることのない存在感が特徴であった。

三重県立美術館に  
今年の秋、  
柳原義達記念館ができるで。



とうとう最後のさくひんになってしもたわ。よく  
ここまでついてこれたな。ほめたる。斜め読みし  
たひとはもういっかい振り出しに戻るこっつ！  
ここまで来たら、この右のさくひん見て「なんや、  
もったきつちりとかたちつくつたらどうや」とは  
言わんよな。芸術家っていうのは、見たまんまを  
そのまんまつくってるんとちゃうからな。強調し  
たいところは強調して、ひかえるところはきつち  
りとひかえてある。つくってる最中なんか、自分  
にとっていちばんいい色やかたちをさがしたりな  
んかして、悪戦苦闘して、も〜そら大変やるな。  
人生山あり山あり、ちよっとだけ谷あり。

やなぎはらよしたつ(1910- )

神戸で生まれた。18歳のとき、日本画を勉強していたが、『世界美術全集』という本に掲載されていた、ブルデルの彫刻の写真を見て感動し、彫刻家になることにした。43歳のときには、もう一度彫刻を基本から考え直すためにフランスへ留学、立体的なものとのらえ方に磨きがかかった。帰国後は、日本彫刻界の第一人者としてリードをし続け今に至っている。



やなぎはらよしたつ  
柳原義達  
《赤毛の女》